

嚶鳴館遺草卷第五

つらつらふみ君の巻

つらつら世の中を被成御覽候所、大概高位貴人には

知慮通明徳行優美なる君は稀々にて無位素賤の

士には知識人に勝れ、徳行世に被尊候人も不断出

候事、御会得難被成候間、愚老所見御聞被成度との御事、

篤と承知仕候。先以高貴の御身分にて、ケ様の所に被付

御心候御事、必竟常々御好學御読書の御力と感心仕候。

愚老淺學之所見、賢慮に相叶可申哉、無覺束奉存

候得共、貴問に随ひ無腹藏申上候。不敬之文言等は

御用捨可被下候。先づ人と申物は、上は天子王侯の尊貴

なるより、下は山野細民の卑賤に至まで、此世に生れ

候得ば、其儘教と申ものにて人と成立候事に御座候。

赤子のうちは混々沌々、ほぎやほぎやより外は無之物に

候を、父母がいだきかかへ候て、ひだるいかとて乳をふくめ、寒

いかとて着せ、あついかとてぬがせ、ねむいかとてすかし、七夜

のうちよりししをやり候得ば能申事を聞、取はづし

を不致とて、無理無体にしいしいと教へ、扱目も見え

耳も聞え、舌も廻り手足も働き候程に相成候得ば、

父母兄弟を初め、寄添ひ候程の人が、ぢぢばばととかかと申習はせ、月日を指てはののさまとをがませ、花をうついあかいとをしへ、鳥はとと犬はわんわと申聞せ、にぎにぎとて手を握らせ、あいよあいよとて歩び習はせ、寸時の間も教へ不申といふことなく、是によりて成長いたし、十五六とも申せば最早人中に立交り、身分夫々の付合をも致し、熱い寒い否な応の辞義挨拶も人なみなみのおとなと申ものに相成候。此段は貴人とても賤民とても、事品は替り候得共、教なくて成立候と申人は無之候。然處に身賤く生れ候得ば、何弁へもなき幼年の時より、聊もあしきこと有之候得ば父母兄弟杯が目をいからし、齒をかみおどし戒めて、かくするものぞ、さはせぬものぞとて、しかりののしり候故に、幼児の時よりものに遠慮氣遣ひと申事を自然と覚え、苦しきを忍び、大儀なる業もいたし習ひ、人の気をかね目顔を悟り成長いたし候得ば利発なるも愚鈍なるも、人間相応の勤は致し候事に御座候。其中に福德厚く受得て生れ候人は物心覚へ候より、いつとなく手習学問杯に志ざし候て、素読を致し講釈など承り、少々宛合点参るに

随ひ、日々月々に面白く相成、夫よりしては人も頼まぬ
辛苦心労をも自身と好み候て、なつかしき父母兄弟
の手を離れ、他所他国へも罷越、他人の交りをも広く
致し、堪忍用捨をも致し習ひて、飢渴の難儀をも
身に受け、人情の厚薄人事の苦楽をも弁へしり、
賢智ある人を見れば敬ひ尊び、教導指南を願ひ
受て古今の世の姿、安危存亡の道理まで会得仕り、
身に微官寸禄も無之候得共、自然と人にも信用せられ
候て、終に名誉の人と相成、素賤のままにて高位貴
人の前にも伺候し、治国安民の談にも預り候程に
相成候事に御座候。惣て賤き作業にても稽古修行
を不致候て、生れのままにて上手功者に相成候事は、古今
無之儀と相見へ申候。古の聖王賢君と申せ共、胎教
と申候て、懐妊の内より教を設け、生れ出玉ふ日より
賢相輔佐の大臣、忠信篤敬の侍臣、左右前後に立
並びて、起居動静教へ戒め諫めただして、下々の
父母兄弟の如く、しかりののしり打はたきをせぬまで
にて、寸分の油断なく教へ育て参らせ候に付、爾の如く
聖王賢君にはなり給ひし事に御座候。恐多候得共、
東照宮の御幼年より、千辛万苦を被為積候て、天下

の主と成給ひし儀は、誰も彼も伝へ承り候事に御座候。
然故にかくまで目出度御代となり、御子孫御長久に被為
栄候御事に御座候。乱世の時を推し考へ候所、只今国主
城主の面々、其先祖先祖を承り伝へ候得ば、扱も扱も
辛苦艱難なる儀共言語に絶し候事に御座候。然所、
東照宮の御幼年より御辛勞を被為尽候御かげを
以て、四海太平に一統仕り、弓は袋に包み、太刀刀は鞘に
納り、けふよあすよと年積り世移り、最早弍百年の
安樂世界に生れ候人は上下共に何の恐れ氣遣ひも
なく、次第次第に驕奢安逸の風俗に相成、諸侯貴人は
腹の内よりの諸侯貴人にて、生れ出玉ひたる日より
前後左右に立寄候程の人は、唯一筋に機嫌を伺ひ、
追従を専に致し、聊發明らしき事も有之候得ば
大さうに誉そやし、余程悪敷事有之候てもそれは
おしだまり候て、婦人女子の宮仕へ同様に面を和げ
声をひそめて、角立ぬを第一の奉公と心得候得ば、
人君の作業は冠装束を美敷被召、ものごし立廻り
重々敷下よりは一言の善悪も難申上様にふるまひ
給へば、是を威風ある君と称しおほへい手高にて
大儀苦勞の言葉をも、むさとかけ玉はぬを尊き

ことに存じ、かりにも恭遜謙讓の姿は、おめおめ敷様に
恥玉へば、下人臣の行儀もまた衣紋立派に立廻り、
閉口低頭して、是非善悪の沙汰は一言も不申上を、
君を敬ひ尊ぶと心得候事故に、凡今の人君は生れ
出玉へる日より、人の実心実情の取扱ひを受玉ふ
こと露いささかもなく虚偽浮薄の介抱にのみ育ち
給へば、人情世態安危存亡の道理を悟り玉ふべき
便りなく、成長に随ひ驕傲の心のみ募り候て、貴人
と申者はよきもあしきも、人はすべて敬ひ尊み、大切に
存するものとのみ思ひ玉ふことに成行候こと、是非も
なきならはしに御座候。乱世の時は貴きも賤きも人も
我も一統に不安心の身の上にて、足輕鎧持の機嫌
をさへ大切に心得、たべる物を分て与へ、着る物を脱
きせて、人の心を取不申候得ば、まさかの場所にて
身の代りにならぬと申道理を存じ、其中にも
名将賢主と聞え候程の人は、取分此勘弁万人にも
勝れ、我一己切の知恵才覚にては、何事もならぬ
ものと申所を深く会得して、家来眷属と申せば
手足の如く大切に存じ、其手足の助を以国郡の
主となられ候時は、忠義有功の臣には高知貴職をも

授け与へ、身にかへて重宝被致候に付、其人々も主人は
一身の首よりも大切に致し、手足の力を限り、君の
為国の為には身を塵芥とも不存、君に聊も過失あり
て、世の謗りをも受玉ふべき時は、命を捨て諫言
教訓を尽し、君を明君に仕済し、我は忠臣になり
済して、君臣ともに今の世までの手本とは成候事にて
御座候。只今の世は君に君の稽古修行とても無之、高位高
官には生れ出玉ひながら、明君賢主と後代称せられ給
べき福德はたへて生れ付玉はぬ衆中も、あまた有之
候様に被存候。まづ諸芸術を御覧可被成候。劍術に名有
人は、折々人に打たたかれ候人が上手に相成申候。馬術に
功者なる人は折々落馬も致し候人が名人に相成申候。
一度も打れ不申、一度も落不申稽古修行もなく
て、直に達人に相成候人は無之候。人君も幼年より
しばしば諫諍の臣に仕こめられ玉ひて、折々赤面を
被成候程の人が、いつにても明君賢將に成玉ふことに
御座候。是は今の世斗にては無之、常々御覧被成候通、
古今の書籍に記し、聖賢の君と名を残し給へる
君は、唯此稽古修行の功を積玉ひし人々にて御座候。
世話に申候盲蛇におぢずと申ことは、めくらは勇氣なる

ものにてへびを恐ぬと申訳にては無之、我をさす蛇が
目に見えぬ故に、をしげなく踏つけて、足をさされ候と
申心にて御座候。必竟学問を不致候得は、古今の姿をも
不存、何あやぶみ恐れ候気遣ひ用心も弁へ不申、無理
無法の気随気儘に相成候て、貴賤ともに浅ましき
謗り恥辱を受け、人と生れ候詮も無之、夢現となく
一生を過し、草木の枯朽候様に身を終りたる跡は
何花香も残り不申、下賤無智のものと同敷、苔の
下露と消はて候事に御座候。前文にも申候通、素賤
の身と生れ候得ば、物心存じ候より、人は此身を終り
候までは、不道理にては人がゆるし不申、一生が行届かれ
不申候付、何卒一生を安楽に人にも人らしくいはれ
候半と存候得ば、さまざまの堪忍苦勞を致し才
不才相応におのれが心力を尽し申事に候得ば、其中より
名誉顯達の人も多く出来申候事当然の理に御座候。
貴人と生れ候得ば、右申候通心勞苦行も人にさせ
思慮思惟も人にさせ我は我にて一生は済と申所より
賢知有徳の君は稀成ものと相見申候。ケ様に申候得ば
我は我にて済申候て、辛苦はいらぬものと申様に相聞
候得共、人と生れ候て人たるの知恵を天よりうみあたへ

玉ひしかひもありて、我が我より思慮思惟も致し候得ば、心は我心にて、一生も我一生にて御座候。其かひもなく人の思慮思惟にて終り候得ば、我心としては無之、永き一生も人の一生同様にて、我身は有て無き物に御座候。是を行尸飛肉とも申、醉生夢死とも申あぢきなき人とは申候。但し夫とてもままにして、大きな赤子の上下着たる同様に世を過し申候人は、是非善悪の沙汰には及不申候。君侯などは御果報目出度人君に生れ出玉ひ、又其上に天福万人にも御勝れ、ケ様の道にまで御立入被成候て、かくまでの御切間に及

申候事、誠に以重畳目出度御事御座候。弥益人君の稽古修行を御積被成候て、後代までの鑑に被為成候様にと奉存候。愚老が所見とても別段なる義は無御座に右申上候事は皆々常々被成御覧候手近き書物に有之候道理に御座候得ば、大略を申述候迄に御座候。誠恐。

○先達て御切間に付愚意申上候所、賢慮に相叶御悦被成候との御事大慶仕候。右に付最早世子にも追々御成長被成候得ば、君侯御一己而已にも無御座、世子へも人君の御修行被付御心度思召候付、右修行の法則如何御心得可被成哉、委敷御聞被成度思召候との御事承知仕候。先書

申上候通、人君の御修行は常々被成御覽候四書五経
を初め、凡書物一枚御開き被成候得ば、悉く其事のみ
にて御座候得ば愚老不申上候共、御自見も可被成儀には
御座候得共、貴間に候得ば誰にも能存候事ながら、御答へ
申述候。貴意の通御自己切の御事は不及申上候得共、
如何様世子御育ての義は、猶更厚く御心得も被為有度
御事奉存候。惣てものはまづきたひと申事有之候。
南蛮鉄も三遍鍛より五遍十篇の鍛は金もよくねれ
あひ候て太刀刀に致し候ても、きれ味もするどに
御座候。天草櫓も削立の儘にては弱く、打はりを致し
込み候得ば、しなひもよく折れ不申候。万物此道理にて
人も生れ立より日に晒され風にもまれ、陰陽自然の
寒暖に身骨を鍛ひ候人は、無病壮健に生立申事に
御座候。然に貴人と申物は生れてより此鍛ひをうけ
玉ふことなく候故に、氣力も自然と薄く、ものに堪へ
忍ぶことかよわきものに御座候。されば何事も気折
には不参次第よく取扱ひ不申候得ば成就不致候。仍之
まづ習慣を油断致間敷事に御座候。貴賤共に子は
とかく親のまねを致し候事、幼年より見慣ひ聞慣
ひ候故に御座候。良弓の子は箕を作り、良治の子は裘

を作り慣ひ候事自然に御座候。然ば子共に善業を
為致度存候得ば、まづ親が善業を致し候て見せ申
候事当然の理に御座候。まして御子達に賢君の稽古
修行を御仕入被成度思召候はば、まづ御自己に御勤可
被成事不及申上候。乍併いつも申上候通、下々の子共
は幼年より親の取扱ひも無造作にて彼鍛ひ丈夫
にて熱い寒い退屈大儀もいやを不為申仕入候得ば、
都ての作業も次第に苦勞難儀とも不存勤習ひ
候得ば何事も面白み早く付申候て、さのみせがみ立
不申候得共見るを見まね聞を聞まねに、いつとなく
上手名人に相成申候。膏梁之性難訓と古より申候て、
うまくたべ暖に着て、物に気兼氣遣ひなく生ひ立
玉ふ貴人は、生れ落より前後左右が厭ひいたはり候事
を専要に致し候得ば、物事しひて被勤候事は甚
難き事に御座候。げに下賤の身分とは違ひ群臣左
右に圍繞せられ、万民の上に被立候て、尊き身分に
候得ば、下々同様に押つけ押下げて取扱ひ可申訳は
勿論無之、機嫌を伺ひ程能取かひ、修行も募候様に
可致事には候得共、併此いたはりての心持次第にて
以外の間違ひに相成候事に御座候。真実に主人を

大切に存じ、行々賢明の主にもなられ候様にと、思ひ
はまり候侍臣計に候得ば、常々労はりかしづき申候
内にも、為に相成候筋を昼夜心得居候事に候得ども、
先書にも申候通、当座の機嫌のみを伺ひ、我不首
尾致さぬ様にとのみ心得候人計立並び、介抱致し
候得ば、兎共に飴と申譬の通、虫の出候は不厭、あまい
言をのみ進め申候。是を君に鳩毒をすすむる邪佞
の臣と申候。此所を弁へられ候が、人君の稽古の最初
第一に御座候。扱毒はすすめ申間敷と存じ候人は、必当
座の機嫌には随ひ不申、苦み計を申物に御座候。苦けれ
ども虫の薬と世話にも申候通、虫の薬はにがきに
勝る物は無之候故に、古今の名将賢君と申程の
人は、この苦口をきく人を秘蔵致され候て、甘みを申
家来を厭ひ嫌はれ候事に御座候。但し人情と申物
は、我と我同志の間柄にても、人の気にはさはらぬ
甘い言は申よく、機嫌不構に苦口は申悪き物に
御座候。まして主君の威は、雷霆よりも恐きものに
御座候得ば中々並々の気丈にては齒に絹きせず
申事は、至て難成事不及申候。然ば御子達へ賢君
の稽古をさせられ度思召候はば先づ此輩を御撰み

御附被成候事、最第一の儀と可被思召候。其上にては御修行の被成方御思惟次第、何様にも相調ひ可申事に御座候。已上。

○人君の側には兎角正直にものを申人を被召使候が第一と兼々被思召候所、愚老御答申候趣と符合致し候付、御安悦被成候との御事大慶仕候。乍併是非善悪を明かに致弁別、正直に申述候程の人に、御事を被見候との御事、御尤に承知仕候。如何さま何方にても御家来は数多に御座候ても、右の筋を睨と弁へ君を諫言など仕候程の人は、沢山には無之物に御座候。誰とても主を

持候人は、我君あしかれと存候人は一人も無之候得共、心に弁え覚え候力無之候得ば、申上度儀も可申述様も不存、むさと口出しも難致、心中には不快に存候得共、おしだまり候て、其日其日を過し申候事げに余儀もなき事に御座候。さればなきぞとて被捨置候道理も無之候得ば、そろそろ申ものの出来候様に被懸御心度儀と奉存候。是非善悪を弁へ申候人の出来候様にと申候手段は、人に道理を知せ申事に御座候。人に道理を知せ申候手段は、学問を為致候事に御座候。学問を為致候は、まづ大学の道はと読み習はせ申事に御座候。よみ

覚え候得ば、其訳を存度相成候事人心の常に御座候。
一つ承り二つ承り、数をかさね申候得ば、物事のしれて
参り候事人心の靈妙なる所に御座候。心に知れば
口にも申され、身にも被行候事も、又自然に御座候。
世話にも申候通、習はぬ経は読れぬと申事は、聖賢
の上にてても同様に御座候。世に物知りと申人も、習はぬ
むかしは素人にて御座候。然故に御覧被成候通、古より
聖王賢君の天下国家を治め給ふ道も、まづ人を
人に教へたて候が、治道の手初に御座候。人に善悪を
弁へさせず、善をせよ悪をするなど申事は天子の
御威勢にても不参儀に御座候。御家中の輩も学
ぶと申事、よきことと申訳を存候はば、誰かひとり
不学のものは有之間敷候。愚老弱年の時人の咄に
承り候事有之候。或主人生得学問嫌ひにて、常々
被申出候事も不道理のみにて一家中致迷惑候付、
家臣共存付候て、兎角少々講談にても被承候はば道
理も分り可申と申合、色々とすすめ候て、儒者を招き
大学の講釈を初め申候所、一座被承候内いかう退屈
にてふさぎ被申候哉、目を舞し被申候付、夫よりいよいよ
嫌ひに被相成、講釈と申ものは、人には大毒とてふつつ聞

不被申候付、弥不道理もつのり気儘氣随に物ごと被申
出候て、兎角家中の迷惑不大形候付、大臣共又候色々
訴訟致し、せめて一座御聞被下候得とて、又或儒者を
招き講談を為致候所、初の程は又目を舞し可申か
とて甚不安心の容子に御座候所、右の儒者如何様に講じ
候哉、殊の外に面白く被存、一向退屈の体もなく候付、家臣
共も甚致大悦、まづ短かく申候様にと、側よりささやき候付、
能程に講を休め申候得ば扨扨面白事に候、嘸大儀には
可有之候得共、可相成は今一度承度との儀にて、夫よりは
常々講日を被待兼被承候付次第に道理も合点参り、
後々は余程ほめ候程の主人に被相成候由定て初の儒者
はこと六ヶ敷自分が多年の精学の功を其座きりに
向へも、会得為致度微妙の道理を細かに説たるにて
可有之候。然故にうゐうゐ敷被承候、耳には何の事に候哉
一向訳も聞え不申候付、退屈も被致候事、断成儀に
御座候。後の儒者は定て功者にて、書面の通誰も彼も
会得の相成候筋を大さやかにすらすらと講じ候付、被承
候に随ひ、道理も分明に分り、実に実に面白く被存候筈
の事に御座候。惣て諸芸共に、しらぬ人が嫌ひに相成
候物に御座候。茶の湯蹴鞠能囃子にても、しらぬ内は

退屈にて、少しも其道を存じ候得ば、面白く相成候事、人情にて御座候。是によつて世話にも下手が嫌ひになる、上手が好きになるとも申、嫌ひが下手に成、すぎが上手に成共申候。兎角世の中は間違多き物に御座候。我主人は嫌ひと申家来は、まづ家来が嫌ひに御座候。我家来が嫌ひと申主人は、先づ主人が嫌ひ成物にて御座候。嫌ひか好きかなるかならぬは、致して見不申候ては難決物に御座候。されば人々の学ぶ心に相成候は、上一人の心持が本に御座候、善悪利害を弁へ、人に利害を能教へ諭し申ものを、一両人も御引立被成候て、御賞翫被成候得ば、誰も御賞翫には預り度、其内には才不才の差別は可有之候得共、其人相応に知恵もひらけ、道理の分り候程には相成候事相違無御座候。但し夫とても差当り御手元に相応の人柄無之候はば他所他国の人にては御注文に叶ひ申候人を御雇ひ可被成御事に御座候。雇ふと申事は恥にはならぬ事と相見申候。先大きく申候はば、天地の妙用にては聖徳の天子を御雇ひ被成候て、陰陽造化の功を助けて御もらひ被成候。天子は諸侯を御雇ひ、四海を治め玉ひ国主領主は家老諸役人を御雇ひ、領分の世話をさせられ、侍は鎧持仲間をやとひ、奉公の働を助けてもらひ申候。

ちいさく申候はば、人の心の臓は一身の主候得共、手足を雇ひつかみさすり、あるきはこびも仕候。其手足も大指計にては不参、中指小指の手伝ひを雇ひ不申候得ば、なでさすりも叶ひ不申候。申て見候はば、尊き御方雇ひを多く御入被成候事に御座候。古今高名の武将も、勢を多く雇ひ持玉へる人が大身大家にて御座候。綱、公時、武蔵坊にても、己一人にては一陣の戦は持れ不申候。されば雇ひ候事は美目なることにて、恥辱にはならぬことと被存候。乍恐東照宮は六十余州の大小名を能御雇ひ被遊候故に、如此一統太平を被遊候。他山の石以て砥とすべしと申詩の教へは、常々被成御覧候事に御座候。相州物は相州の砥にて研ず候ては、きれぬと申訳は無之候。扱雇ひと申時は師匠を一人御雇ひ被成候事に御座候。師匠は一人にては百人は教へられぬと申事は無御座候。一人に申聞せ候道理も、百人千人に申聞せ候道理も、道理は同じ道理に御座候。申さば一人も多く集め候て申聞せ候得ば、承り候人も我身の上と計は不存、たとひ身に覚へ候気の毒なる儀有之候ても、恥敷とて顔を赤め申事もなく、心のどかに公に承り候内には、人々己々何となく存当り思廻らし、道理も得と合点の参る物に御座候。主人一人へ指向ひ申候時は、主人計を異見

致候様に相聞え、家来へ計申聞せ候得ば、家来計を戒め候様に聞え候物に御座候。君臣一同に承り候得ば、君の心得も有之、家来の心得も有之、上がよければ下の為もよし、下がよければ上の為もよしと申道理分明に弁へしらるることに御座候。併師を尊ぶと申道をまづ心得不申候ては不参事に御座候。古今共に師を尊敬仕候事は、重き道に御座候。申せ聞ふと申様成疎末成ことにては何を承り候ても無益なることに御座候。依之古先聖王より後世の明君賢王に至るまで、師を尊崇被成候事は常々被成御覽候書面の通に御座候。唐土の昔昔計にても無御座、我朝代々の天子親王の御上にても師臣を尊寵被為在候次第は、物語り等にも書伝へ、殊の外にうやうや敷大事なることに相聞申候。先此段を急度御思惟被成候はば、夫よりしては御家臣等御用立候人あまた出来申候て、後々は外より師匠を御雇ひ被成候には及申間敷候。如何様よき田地にても、種を蒔き不申候て、はへ申候苗は無之候。已上。

○先書の趣御覽被下候所、兎角御家中によき種を御蒔被成度思召に付、右種に相成候人を御雇ひ可被成思召候得ば、猶又種の美悪撰み方委敷申上候様にとの御事承知仕候。まづ人の才能は一様には無之、得手不得手有之

事に御座候得ば、一人に十善を備候事は聖人の外には決して無之儀と被存候。乍併善き種にも被成度思召候はば、大概不具合なることのすくなき人を種に被成度候。不具合と申候は、昔より学問を尊び候事は学び候へば心もけなげに道理も明かに、所行も正敷相成候を尊び申事に御座候。然処学び候て、物識には成候得共、志行正しからず不義不信の沙汰多く世間に聞え候人は、其学問とは喰違ひ候付、是を不具合人と申事に御座候。一つ二つをあげて申候はば、孝悌は美德と申事は乍存、自身の所行は親兄にもしほらしからず、驕傲と申は不徳なることと乍存、我一人ものしりと心得、人を見下し古賢先輩をむさと誹謗し、誠の賢者は我よき道理も、若や心得違ひにては有之間敷哉と、恐れ氣遣ひ候をこそ、謙讓の徳と称し候事なるを、さまで見出したることもなきを珍敷大相に申唱へ、ただ俗人を驚し申事を、自己の手柄と心得候を、古人は学ぶ所にそむきたる人と申候て不具合の甚敷ひとに御座候。ケ様なる軽薄の人種に相成候得ば、見るを見まね聞を聞まねに何わる心もなき素人も、なまなかこの学問故にもて余したる人に相成候事、世上に不少候。

種は一粒に候得共みのり候得ば千粒万粒にもはびこり候間、先大事成儀御座候。但し行跡正しければ師匠は夫計にて事済とも難申候。師匠と申時は人の間を待ものに御座候。十の内三つ四つは不弁存候共、残り六つ七つ位は弁へ居不申候ては、人の信仰も生じ不申候得ば、博学多識勿論の事に候。然し唯博識多才而已にて、躬行の美無之人を用ひ申候時は、貞宗、正宗如何に結構なるわざものとして拔身のままにて腰に指候同様にて用心と存候内に、いつか自身の怪我を取出し申候、左候得ば先素志素行を失ひ不申人を師長に御用ひ可被成事御座候。素志と申は幼年より存込み候よき志をいつ迄も持通し候事に御座候。素行と申は幼年より平生所行よろしく、壮年に相成候ても、右の善き行をたゆまぬ人を素行ある人と申候て、はへぬきの人間に御座候。但し少年の時は不都合成所行も有之候得共成長の上良師良友の助にて、志行を改め有徳の士になり候人も数多有之事御座候得ば、人君広く人才を挙用せられ候日には、右の前過前失を以て被捨候事には無之候得共、なみなみの人情にてはこの人にも以前ケ様ケ様杯不都合を数へあげて、善を妨げ候

人も多き物に御座候得ばまづは癖のなき、人を師長に立て人を教へさせ申時は、初より信仰もつきおとなしく教訓を受用致候事定りたる事にて、此段はおしつけにも不参事に御座候。扱又平生躬行正敷と申内にも生れつき窮屈片気なる人は、人の師には難致候。何故と申候得ば、惣て人を取育て申心持は、菊好きの菊を作り候様には致間敷儀にて、百姓の菜大根を作り候様に可致事に御座候。菊好きの菊を作り候は、花形見事に揃ひ候菊斗を咲せ申度、多き枝をもぎとり数多のつぼみをつみすて、のびたる勢ひをちぢめ、我好み通りに咲まじき花は花壇中に一本も立せ不申候。百姓の菜大根を作り候は、一本一株も大切にいたし一畑の中には上出来も有へばも有、大小不揃に候ても、夫々に大事に育て候て、よきもわるきも食用に立て申事に御座候。此両様の心持を弁へ可申事に御座候。人才は一樣には無之ものにて、一概に我持方の通りにのみ仕込み可申と存候様なる片気にては、被教候人も堪兼候ものに御座候。知愚才不才夫々相応に取かひ候て、必竟よき人にさへ相成候得ば、何ぞ御用には立ものと申心得無之、識度狭少なる人は師長には難致事に御座候。先

ケ様の所御勘考可被成候。蒙仰候種の撰みかたも被成
御覽候書物には数多有之候得ば愚意大概を申述候。以上。

○追々得賢慮候付、弥御家中に学問被行不申候ては

不叶儀と思召候得ば、可然儒者御雇ひ指南御頼被成

度思召候得共、当時学問には種々流義も有之候て、

何れか可然御一決難被成候得ば、当時行れ申候、程朱学

仁斉流、徂徠流、三流の内是非を致決定候て、申上候様に

との御事承知仕候。乍併愚老式先賢先輩の學術

其是非を致裁断申上候などと申儀は中々難及儀

御座候。先以一家の学を興し候程の人は何れ共に

一世の豪傑にて、各所見有之事に御座候。但し聖人とても

無之候得ば人々是非得失は勿論有之うちの事に御座候。

長を用ひ短を捨て申候はば、何れ利益の無之学も

有之間敷候。然ば其門流々々にて其師学を推尊致

候事は又尤なる儀に御座候。乍去何流にても未学未

熟の人に候得ば、一概に其書のみを読み其言のみを

信じ、広く是非得失を詳考不致、唯其流義の外

は惣てひがことの様に申唱へ候事、古今同弊に御座候。

譬へば僧家の行法も四宗八宗さまざまに品替り候得

ども、定て得仏性の外は有之間敷候。儒者の言論も

種々に御座候得共成徳行の外無之様に被存候。必竟
其僧の修行次第仏性をさへ得候はば、何れの浄土へか
往生は可致候。儒者も其人の修行次第、美德をだに成
就致候はば、何れの国家にでも御用には立可申候。左候得ば
先其人の徳不徳を御選み被成候て流義の處はさのみ
御撰み無之候ても可然様奉存候。己々流義を偏屈に
申唱へ候て、他流を排棄致候は全く其儒者一人切の
私心にて御座候。人君は万民の主に御座候。何れにても
篤学美行の賢者を御用ひ被成候て、一家国の人心を
教化有之、一体の風俗を美敷被成候と申が公道なる
御所作に御座候。但し先書追々得賢慮候通、偏僻なる
人をば師長に御立被成間敷と申義は、彼菊好のきく
作り候様には致間敷と申道理にて御座候。兎角人君の
花畑には、牡丹、芍薬、菊、桔梗、紅白黄紫咲交り候て、
いつにても生花御入用の時は、御望次第に赤なり共黄
なりとも、其香かうばしく花形見事に開き候を、
何十本にても花瓶へ御とらせ可被成事と奉存候。はな
ぶりが悪きとて枝も苔もむしり捨候て、我好の黄
菊一色と申事は、万民の主の物好には不宜事と奉
存候。人の行は善悪唯二通りに御座候。善人多く生じ

悪人の滅じ候様にと申より外に、教化の本意は無之儀と奉存候。をかしき咄を承り候事有之候。或浄土宗の老師宗徒の内に内々法華を信じ候由を承り甚不決に存じ染々教誡致し候には、世の諺にも法華仏にならずとこそ申せ、左様に法華を信じ被申候ては、中々極樂往生は不相成事に候と申聞候所其人申候は左様には御示し候得共、此間我等親敷浄土宗の人致病死候て、三日目によみがへり申候。冥途にて地藏尊の御手引に逢ひ、地獄極樂をことごとく見て帰り申候所、常々念比に致し候法華宗徒の内にも大分往生を致し居候もの有之候由。現在此比の事に御座候。然ば一概に法華仏に不成共難申候半と申候時、老師大きに気色を損じ、扱々苦々敷事に候。左様なれば弥陀如来も最早尊とからず候。たとひ如何成大善業の人にも致せ、我祖師源空上人の一枚起請を背き、他宗を念じ候者をむさと極樂往生を為致膝元へ引寄られ候事、阿弥陀如来以外の外の不都合と存候、左候はば愚僧など最早最早往生極樂を願ひ候念は無之候と申候由、大体世上の儒者も皆此浄土宗老師と一般の見識と被存候。古今の諸賢世話をやき

候は何れみな先聖後聖の教を尊崇致し候為に

御座候。たとひ孔孟の本意には違ひ候ても、我流義の

祖の遺言には違ひ申間敷と申事は、何共会得難致

儀かと被存候。申さば今の世に生れ候人は、一統にむかし

生れ候人の弟子にて御座候。愚老如き生質魯鈍なる

ものも、幸に幼年より書物を読習ひ秦漢以後の

諸書程子朱子等の遺書も伺ひ、仁斉徂徠杯の見識

をもち候て、其影にこそ寸志の愚見をも申様には

相成候事に御座候。然は人しれず此恩徳は廣大無量なる

儀と存候。乍併うみの親の教へ置く事にてても、成長の上

にて考へ候得ば、一概に左様にも難成事もたまたま有之

ものに候。とんぼうかみと月代剃り候時の差別もなく、

親の申置たる事とて是非其俣執行ひ候て大間違

を仕出し候はば、親の心にては草葉のかげよりも余り

悦びは致間敷候。必竟宗論をつのり候僧は悟道徹底

の師には有之間敷候。学脈のみを申つのり徳行の

沙汰に及ばざる儒者も難信人と被存候。人君の学政

を御世話やかれ候主意は、能教へて人民を善に向はせ

申事が専務に御座候。程朱学を尊び候人は徳尊き

程朱学師に学ばせ、仁斉徂徠を好き候人はおとなしき

仁斉徂徠学者に教へさせ、兎も角も人をよくとり
かひ候て、善心になり候様に可被成儀にて御座候。何流
にても我執つよく人を得教化不仕候はば、無益の学問
と可被思召候。誰とても昨日孔孟より直に授り受候
弟子にても無之候得ば、古賢先輩とても是非得失
の無之候ては不叶儀と可被思召候。先書申上候通大体
師長は素志素行正敷、片見片気無之、学問も諸書
広く見渡し、古今の治乱興亡人情変態によく
通じ、唯人を親切に導き、はなたらしの小童迄も
何卒善行善心の人になり立候様にと、実情に取
飼ひ候人を先御家中の師に御定可被成候。善言善行
を見習ひ聞習ひ候て、夫より追々成立候はば其中
よりは一廉の大賢英才も出来可申候。然ば先寛々
教化に向ひ候様にと御世話被成度御事と奉存候。己一人
ものしりと心得候て、驕傲不恭なる人を師長には必
御遠慮可有御座候儀と奉存候。以上。

つらつらぶみ臣の巻

君侯いまだ御弱年の御事、貴公御忠誠を以、そろそろ

御取かひ被成候て、行々名誉の君と仰ぎ候様被成度との

御事、乍今更さりとは致感心候。いつもいつも得御意候通り、

一国の治乱万民の憂喜は、只君一人の徳不徳に懸り

候事不及申候。上一人だによく候はば千事万行何が悪

かるべく、上一人の宜しからぬと申時は、千事万行よかる

べき道理は古今無之儀、是又不及申候。大人は君の

心の非を格すと有之候。貴公などの御職分にては何は

差置唯君心を御取かひ被成候事、無上の御忠誠莫大

の大功にて可有之候。今世ケ様の儀に志を尽し候人は

扱々珍敷候得ば乍慮外貴公などは稀代の忠臣と存

候事に御座候。扱人君の徳は兎角真実心に御自己より

善を御好み悪を御嫌ひ被成候より外は有之間敷。其

真実心に自己より善を好み悪をにくむと申事は

是非邪正の道理を自己の心に睨と弁へ不申候ては

不相成儀、其是非邪正の境を自己の心より弁へ候道は、

学問より外には無之と御心付候との事、最早此上に

明智明慮は有之間敷存候。弥益学問を御進め被成

候事、いつ迄も勇猛に御怠慢無之様にと存候。但し

御真実に学問を御好き被成候様にと色々被尽御心候得共、
とかく此所御思慮の通難参御心勞被成候との御事、御尤
至極に致承知候。御深切に御申越の儀、乍慮外愚意の趣
無腹藏得御意候。先以貴公御志は至極に候得ども、一体の
御取計ひ方未御行届無之故かと存候。先篤と御思惟
可被成候。何の業にても初心より面白き事は無之候。
まして学問と申は心術の事に候得ば、御弱年の御方
御自心初より面白がり可給わけは無之候。依之古より
教学の道はまづ良師を求め良友を選び申事に御座候。
師友、無之候て聖賢の君にひとり成られ候人は無之候。
扱良師良友とても其君愛敬の二つ無之候ては、是又
無益の人に相成候事に御座候。軽き身分の人は師匠へは
常々親敷問答をも致し、朋友とは常々心易く咄合
も致し候に付、いつとなく心もとけ候て師匠をむつまじく
教訓を致し、朋友も無氣遣是非を争ひ候に付、其中
に学び候得ば、人も我も何心なく其風に移り、学問
おもしろく相成候事に御座候。貴人と申せばたとひ師範
などと名目は尊く聞え候得共、必竟主と家来にて、
君には何となく軽侮の心持も有之、臣には元より畏敬
の心有之候て、まづまづ十の事は二つ三つならでは

申さぬものに御座候。まして学問御相手に相成候輩も
学問朋立とも難申、唯御伽一通りの心に候得ば、弁へ
存じ候事も、先はおしだまり居候て、むさと不申出候。
是にて主君の学問と申ものの面白く相成候筋はいつ
までも無之筈に候。左候得ばまづ学問の面白く御成
被成候様にと申時は、此處を能く御勘弁可被成事に
存候。されば君の学び給ふ臣は師臣と称し又は賓客
賓師など申名目も有之候。惣て学問の御稽古計は
常礼常格をはずし師は実の師匠、学友は実の学友
と申姿に参り候様に可被成事に御座候。君臣心を隔て
礼法のみにより、はるか末座に手をつき頭をたれ
読かかりよりよみ仕舞まで定りたる文言を講じ、
向へ聞えきこへざるの無差別、礼法を失ひ申間敷
までにて、一章二章を申済し、其余の事は一言半
句も申上ぬ事と申様成姿にては、世にいふ御書院
講釈と申物にて、たとひ何年学び給たり共、少しの
益も無之、誠に規式一通りの事に御座候。人を教誨する
と申心得は、向の年時相当、身分相当、性質相当を考
へ、いづれにも向へ受用のなりやすき様にと申儀專要
にて、書面の義理をたがへず教へかたはさまざま有之事に

御座候。元來御聞被成候方も、いまだ胸中に力とても無之、学問と申物は唯ヶ様にいつまでも聞えぬ事を聞て居ることと計御心得被成候得ば、げにげにいつまでも面白くもをかしくも無之事、尤至極成事に御座候。

但し此姿は大臣重職の人能勘弁有之自身よりまづ其座に伺公して、問答応接を致し見せ参らせず候ては、末々の輩にては不相成儀に御座候。愚老が如き愚鈍なるものも、たまたま諸家の招を請候て、乍無調法師匠の真似を致候處、右之姿にて何れも親み深く申述候に付、いっとなく学問に深く立入被申

候て、後々は愚老など及び不申ほどに上達も有之随ては一家の政事も手厚く、人心悦服致し候程の方々も追々有之候。愚老など外に知慮も無之候得ば論より証拠と申諺の通り、唯々兼ていたし

覚え候所を得御意候。扱右の親しみの内には、時としては詩作のあそび文章の楽しみなども有之候。是又

学問の一事に候得ば、夫よりはいつとなく義理は面白きものと申に相成候事自然と被存候。然ば御申越の趣にては、先ヶ様の處に被用御心度存候。あしく致し候得ば学問々と申名目計にて、いつまでも無面目の素人

にて済し被申候衆も不少様に被存候。必竟取かひ様の
不行届故と存候。但し是は愚老だけの不調法なる
了簡に御座候半哉。猶又博識高德の人へも御相談有之
度事に存候。以上。

○追々御政事御取扱候て、篤と御勘考被成候所兎角上下
一和不致候ては何事も不参届候得ば、何卒一和致候様にと
被尽御心候得共、御思慮の通には難参候に付愚老へ被及
御相談候との御事致承知候。成程上下一和不致候て善政
成就いたし候事は古今共に相見不申候。但し是も極意
の所は人君と輔相との徳量にかかり候事勿論に候。乍無調

法愚昧だけの了簡つつまず得御意候。先以人交りは貴
賤老少知愚の交共に先施と申道有之候。先施とは
先づ施すと申儀にて、交接は向をまたず先我方より
しかけしむけ候事に御座候。人より親まれたく存候得ば、
先づ我方より親み、人より敬れたく存候得ば先我方
より敬ひ、万事人の我によき様にと存候得は、我先人に
よき様に致候事に御座候。貴公などは重職の事、格禄共に
御家にて一二の御身分にて候。左候得ば貴賤と申時は
御身分は貴にて御席より以下は皆賤にて御座候。貴
を以賤に下り、上より下にくだると申は無上の徳に致し

候事は、天地の道も天気下り不申候得ば、地気も上り不申候。天は天、地は地にて陰陽の気交り不申候得ば、万物生育不致候。仍之上下の交り調ひ候は、まづ上が初に御座候。たとへて申候はば賤きものが尊き人の前へ出候時、貴き方よりまづ是へと申挨拶無之候得ば、賤き方より先それへとは難罷出候。此姿にて御考へ可被成候。親みも上より下を親み候が初にて、和するも上より下に和するが初にて御座候。惣て人情は賤は貴きに寵せられ、をさなきは年かさに愛せられ、愚なるは知慮ある人に悦ばれ度存候は自然にて御座候。然所上は下より親むをまち、老は幼よりなつくを待候て、上より先施なく老より先施なく候得ば、下より親むべき便なく幼よりなつくべき便無之候。然時は上下老幼相互ににらみくらべを致候様にて寄付れ不申候。寄付心のなきは疎遠の初め、疎遠なるは不和のもとにて御座候。惣て人嫌を致し候人は人に嫌はれ候人にて御座候。故に古より賢相良佐と申伝候人には、何れもまづ先施の徳厚く、貴を以賤にくんだり、人の心を能取たる人に御座候。さて執政大臣を棟梁の臣と申候事は、上には上屋ねをいただき下には柱戸障子を

ふまへて、上と下の真中に立たる役人を申事に御座候。
然所当時の人は家老執権と申役に居り候得ば、そのまま
主君と同様なる心持に相成、上へ上へと申志は有之
候得共、下へ下へと申志は無之、昨日迄は我人申合たる
奉公も、今日よりは格別に引離候て、物事念頃に不見
不聞候を職を守ると心得候故、接遇の道日々月々に
高上に相成候得ば、下々我と諧和すべき道はふさがり
申事に御座候。貴公杯は読書も被成候て、右の道理は
御弁へ候事に候得ば、一体の和を御志候はばまづ下諸役
の人々へ心易く、物事御相談を御しかけ被成度候。相談
と申時は貴賤上下の差別なく、人々了簡を申合
候て、是非曲直無腹蔵論判いたし候事に候。当世の
姿は下より申達候は皆々五寸一尺の書付にものを
申させ、家老執政の前へ差出し候て、低頭平伏致し、
安否寒温の外は一言も申さず、是非は其指図下知
次第に畏り候て退き候を、官長を敬ふとのみ心得
候得ば官長より裁断申渡候て、受は受候得共、実内心
に服し候哉否は、官長にても不存事に候。諺にも一寸の
虫にも五分の魂と申候得ば、人々腹中には是と非と
有之候事あながち知者賢者にもかぎらず候。然故に

面従後言の悪風次第に増長致し、影にては各々様々の鬱憤を申合候て、うは向とは相違し、内心にはうそ笑ひ候様なる悪情を引出し候て、終には君の御政事をそぞろ事に致しなし候様にも相成候事に御座候。愚老以前或侯国へ被招罷越候て、寛々致逗留学政の世話致し候事有之候。其節家老大臣一統に申合候て、一月三度宛政事に預り候程の役方は一席に会合致し、講書など致候て跡にては四方山の事政事の心得にも可相成咄を致し候。其節は老臣銘々酒肴なども相携候て、酒も汲かはし申事に候。但し咄の内には政事の上遠慮なる筋も有之ものに候得ば、給事杯は耆人も近付不申、諸士相互に酌を致し候、時々は上座執政の人もかはるかはる立候て酌をいたし末々役筋へもたさせ申、ケ様に一堂の上にて低意なくおもひおもひの了簡を申談し、是非邪正の評議を公に致し候に付いつとなく人心一和いたし、其節の取扱万事模様よく政事も相立候て、主君にも甚満足の事に候ひき。只今など存出し候得ば、扱々珍敷楽敷事をも見聞いたし置候と、老後の思ひ出に御座候。とにかくによきことも実々に致し候得ば

眼前の利益有之候。如何程よき事にてても規式一通りにて実々に無之候ては、詮も無之事と被存候。貴公杯は国の巨室、常々人も尊敬致し候御身分に候間、眞実に御志さへ御立被成候はば上下忠節一和の風も起り可申候。何れにも一和と申事は御政事の行れ申候最第一に御座候。忠思を御廻らし被成度事に御座候。必竟和合はならぬものと申言葉は、和合を願はぬ心より申事に候。人性の善に候得ば、善にむかはぬ人は無之ものに御座候。初申述候通人を嫌ひ候が人に嫌はるる元、人に和せざるは人の和せぬ元に御座候。先々先施を御心懸可被成候。御深切の御相談に任せ彼是不顧慮外無調法の有たけを得御意候。以上。

○人君は民の父母と申候得ば、御主君にも先々父母の心持を能御弁へ被成候事、肝要の儀と御心付候て、切角の精力御尽し學術に御向ひ被成候様にと、御取かひ被成候所、兎角時世の俗習にて、主人の学問被致、道理分明に被相成候ては、下々難勤堪兼可申儀、只今迄無之候ても相濟候儀を、いらざる御取そだて被成候杯、人々迷惑がり候得ば、是には御こまり被成候との儀御尤に存候。是一世おしなべ候俗情、元より浅はか成了簡より申事に候得ば、

無是非事に御座候。但し仁智の徳も勇と申徳無之候ては不行事に御座候間、勇猛に御居り御世話被成度事と存候。先能御考可被成候。臣民家国の下に住申候は、てうど人が家の内にすまゐ候様なるものに御座候。家と申せば誰も彼もよき家には住よく、あしき家には栖うく御座候。扱其家はまづ棟うつばりは上道具、柱かもゐ戸障子唐紙などは中道具、縁敷居ねだつく土台廻りは下道具に御座候。然處如何計上中下の道具材木よろしく候ても、上屋根と申物無之候ては一日も雨露の凌ぎは成不申、仍之上中下の材木はたとひ、ひばひのきけやき杯の上材にても、上やねが雨漏いたし候得ば、三材ともに朽腐り申候。少々柱はゆがみ戸障子は破れ損じ候ても、上やねさへ丈夫に候得ば、人は其家に住居申候。然故に上屋根は成たけ丈夫に致度、かやぶきよりはよしぶき、よしぶきよりはこけらぶき、こけらぶきよりは瓦ぶき、其瓦も銅瓦に候得ばいつまでも破れもり候心遺ひは無之候。主君は此上屋ねにて御座候。家老用人諸役人諸頭平士は上中下の諸道具にて御座候。如何計上中下の道具よき材木に候ても、上屋根が破れ屋根に候得ば、家を

可持様無之候。左候得ば上屋根の丈夫に相成候を嫌ひ申候事、先以余りなる無分別に御座候。国の大小臣のおの我こそ棟よ梁よ、我こそ床柱よきき柱よ扱いかめしく存居候内に、屋根がぼろぼろ破れ損じ候はば、如何可致哉。雨露に朽くさり候より外は有之間敷候。家国も上邇人の徳明かに仁義の道正敷被執行候はば、下臣民一統に安泰なる事眼前の理に御座候。然るをあかるく成候を嫌ひ候心は、うしろくらき心有之故に御座候。貴公唯今御主君を明君に可被成との御志は、彼上やねを丈夫に被成、下に住候人々安泰にとの御事候。最早弑百年有難き安樂世界に住み申事は、天下の御上屋ねが御丈夫なる御影にて御座候。今国の上屋ねを御修覆被成候を厭ひ嫌ひ候人情も、必竟平安樂の世に生れ、先祖々々の辛勞苦行して立置候家の内に何心なく明しくらし候て、風雨露霜の難儀を身に不受人々に御座候。此人情に御こまり候て学問と申ものを為致、家が倒れ候得ば直に風雨の難を受候道理を弁へさせ、人も我も供勢に此家を持つくづさぬ様にと申御世話に御座候。扱又むなぎうつぱり弱く候得ば、何程よき上屋ねもたるみ棟梁つよく候ても、

柱々が弱く候得ば又ゆがみ、柱々が丈夫に候ても土台廻りが朽候得ば又かたぎ、土台丈夫に候ても地形がしまり不申候得ば終にはくつがへり申候。百姓は国の地形にて御座候。仍之古より地形の百姓を子の如く憐み給ふを仁君と称し、その地形を預りて正敷取扱ふ代官を良吏と称し、柱戸障子の如く所々に立ならびて、自分々々の役儀を大切に勤る人を忠臣と称し、棟梁の如く上をうけもち下のゆるがぬ様に重しになる人を、賢相大臣と称し申事に候。扱君は上屋根の破れ損じて、下に立物のぬれくさらぬやうにと、心を被用候事に御座候。惣て人は異見教訓を能聞受候得ば、たとひ過失有之候ても、救ひとどめ候事も相成候に付、昔より人君は諫諍の臣を宝に被致候事に御座候。然共諫諍の臣を被用候ば、元来自身の徳明らかなる故に候。一向道理にくらく横紙を破り候人には、致方も無之候。さればこそ昔より諫諍の臣は有ながら、其教に不従家国を滅し候君も数かぎりなく候。殷の末にも箕子、微子、王子、比干、膠鬲など申候賢知の大臣揃ひ居り候得共、紂王不被用候時は致方もなく、みすみす殷の世は亡び申候。今人君

高貴の身分、自心より是非邪正のかみわけ無之と
申時は、下なるものは齒をかみ手をにぎりながら、その
無分別に随ひ破れ屋根の下にてともども朽腐り
候より外は無之候。然故に自己心より恐れ慎み給はり
候様にと申所より、其道理の分る学問を御すすめの
事に御座候。然ば人君の明智になられ候は、尽く下たる
ものの心身安楽なる根元に有之候。是を迷惑に存候
人は何共可申様なき至愚の人に御座候得ば、さやうなる
人々には御頓着被成まじく候。惣じて善政を存立候
時は、賢智の人の服し候様にと申を目当に可致事、
至愚の人は此方より夫々に取扱ひ遺し可申事にて、
其了簡を用ひ可申筈には無之候。善を挙げ不能
を教へ候事、上たる人の心得に御座候。さればまづ主君
を明智に致し、明智の風高根より吹おろし、下々
愚味の草木は其風になびき随ふやうに被成候得ば、
いつの間にか共々に君の明智を悦び有難がるやうに
相成ものに御座候。愚老弱年にて長崎に遊学いたし
候節、笑止なる儀目前に有之候。或町人一家内殊の外
河豚汁を好きたべ申候。然處に隣家へよき医者家移り
を致し、右町家の亭主と念比に相成、彼ふぐ汁を

好き申候儀見候て、常々意見を致し候に付、亭主も尤に存じ一家内ふぐ汁を法度に申付候所妻子召使ひ共甚憤り候て、詮なき医者が隣へ参り、主人のふぐ汁をやめさせ候とて彼是と申合、色々讒訴を致し、終に右医者と亭主とを中たがひ為致候。夫より又々ふぐ汁をたべ候事に相成候。或時又々例のふぐを買求め候て、一家内打寄存分にたべ候處、果して毒にあたり、亭主妻子召使共七八人皆々倒れ伏申候。翌朝になり昼までも門戸を不開候付、近隣よりあやしみ気を付見候處、膳碗も其俣にて行燈の前によりこぞり倒れ居、全くかの河豚の毒にあたり候体に相見候、其内に小でつち一人竈の前に伏し居、是のみ息かよひ候に付、ふぐの毒を解し候には人糞が妙薬と申候て、糞を用ひ候得ば、暫過候て、是は仕合によみがへり申候。其者申聞候は、今日は家内打寄ふぐ汁をたべ申候。私はかねがね隣の御医者 of 被申候を尤に存じたべ不申候所、今日は主人夫婦大きにいかり、主さへたべ候物をおのれ一人たべ不申哉とて叱られ候に付無是非少々たべのこりはそと隠して捨申候と申聞候由。ふぐ汁をとめ申候

医者は身の安全を教へ候人に御座候。然共ふぐ好き共は
却て身の安全を悪み嫌ひ申候。扱ふぐ好きどもが
身の安全を嫌ひ候とて、我も養生をやめ毒をたべ
候は此小でつちにはおとり候人にて御座候。でつちも心
ありて毒を少々給候故、糞は給候得共、命は助り候。
とてもものに全く不給候はば糞もたべまじく候。
すべて俗情はをかしき事多きものに御座候。以上。

嚶鳴館遺草卷第五